広報たじみ　2020年5月1日　No.2328

たじみすと 5

Tajimist May 2020

岐阜県 新型コロナウイルス感染症 非常事態宣言

P2、25をご確認ください

第7次総合計画 7 きらめき未来予想図
―まるごと元気！多治見―

03~07 地域力
地域で育む市民の“わ”

CONTENTS

8~14 生活情報
都市計画決定に関する公聴会・説明会を開催
まちづくりナビ
15 ― 土岐川観察館へ行こう、地球村へ行こう
16 ― 多治見市職員人事異動
17 ― 被表彰者・顕彰者募集
18 ― 国勢調査員を募集します、
特定外来生物の防除にご協力ください
19 ― 入札結果
20・21 令和2年度地区懇談会延期、
駅北庁舎情報・し尿収集
22・23 おとどけセミナー
24 ― FMたじみタイムテーブル
25 ― 令和2年度結核・肺がん検診
26・27 健康情報・スポーツ情報
28・29 定期健診・6月の相談窓口
30 ― バロー文化ホール情報
31 ― 国際陶磁器フェスティバル美濃´20、
おしえてらぴぃくん
32 ― 市民病院だより、時代をつむぐ男と女
33 ― たじみ産春野菜レシピ、青と緑の物語
34・35 マイタウンホットニュース
36 ― 輝く現在（いま）

TAJIMI 80TH
多治見市制80周年
2020

多治見市は令和2年8月1日に市制80周年を迎えます。

新型コロナウイルス感染拡大防止にご協力ください

多治見市からのお知らせです。岐阜県が新型コロナウイルス感染症非常事態宣言を行いました。これ以上の拡がりを何としても食い止めるため、感染拡大防止対策として、特に2点の徹底のご協力をお願いします。（本記事は4月13日に作成）

① 不要不急の外出を控えてください。

② ３つの密を回避してください。

首相官邸 Prime Minister's Office of Japan

厚生労働省 Ministry of Health, Labour and Welfare

厚労省 検索

また、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するためには、感染予防に努めるとともに、人にうつさない対策も重要です。正しい方法での「手洗い」や、咳やくしゃみが出るときは「咳エチケット」を徹底してください。

石けんやハンドソープを使った丁寧な手洗いを行ってください。

手洗いを丁寧に行うことで、十分にウイルスを除去できます。さらにアルコール消毒液を使用する必要はありません。

咳（せき）エチケット　電車や職場、学校など人が集まるところでやろう

マスクを着用する（口・鼻（はな）を覆う）　ティッシュ・ハンカチで口・鼻（はな）を覆う　袖で口・鼻（はな）を覆う

※P25もご確認ください

令和2年4月　保健センター

地域力♡

地域で育む市民の“わ”

多治見市は、市民が互いに助け合い学び合うまちづくりを支援します。

根本校区地域力向上推進会議（ねもと地域力）の自然・生活環境グループが実施した大原川右岸のヒガンバナ育成事業。7月に根本小5年生107人と一緒にヒガンバナの球根の植え付けが行われ、9月に朱色の花を咲かせた。

根本小学校の児童にヒガンバナの球根の植え付け方を教えるねもと地域力のメンバー。

「まるごと元気」を実現するためには、まちづくりの主役である市民一人一人が、自らの能力と個性を発揮し、まちづくりに関わることが必要です。多治見市は、市民生活を心豊かにするため、市民によるまちづくりへの取り組みを支援しています。

例えば、地域住民による防災・防犯活動の強化、市民が主体となった生涯学習、ボランティア活動への支援など、市民活動が活発化するような仕組みをつくり、その活動が将来にわたって継続するよう、次世代のまちづくりの担い手となる「人財」の育成に力を入れています。

今回の特集は、市内4校区で「地域力」の仕組みづくりを手掛ける田嶋義晋（よしひろ）さん、水野敏秋（としあき）さん、吉田邦彦さん、赤穂直文さん、そして市民が主体的に参加する生涯学習活動を支援する多治見市学習館の館長岩下英治（えいじ）さん、職員の長谷川智宏さんと三宅朝子さんにそれぞれお話をうかがいました。

地域の未来を思う皆さんの話から、明るい多治見の未来が見えてきました。

現在“地域力”に取り組む4校区の代表者が地域の現状と将来への抱負を語りました。

※取材は令和2年3月に実施

地域を一つにする滝呂ブラブラまつり

田嶋義晋（よしひろ）さん
第40区区長

滝呂校区では、地域の絆を深める取り組みとして、11月21日に「滝呂ブラブラまつり」を開催します。会場の1カ所に人が集中し、そこだけにぎわう「夏祭り」などとは異なり、滝ブラは基本的に賛同（出店）してくださる方の自宅が会場となるため、街全体がにぎわいます。また、出店者の自由度が高いため個性が発揮され、そこから友人の輪が広がります。つまり、滝ブラは街全体の「面」の中に滝呂小学校はじめ拠点会場の「点」がいくつかあり、それらの調和が特徴となっているのです。

私の家でも子どもたちが野菜を売る「ちびっこ青空市場」や焼き菓子の販売を計画しています。先日開催した出店者説明会では、80人以上が集まりました。趣味や特技を披露できる機会として非常に前向きに捉えてくれています。その他、滝呂小体育館では、太鼓の演奏を皮切りに始まる音楽イベントや中庭で「日陶器まつり」を開催し、集会所では、絵の展示や工作教室なども予定しています。

近所付き合いが希薄になっていると言われますが、第40区では、「地域あいのりタクシー」の導入などで町内会に入ることのメリットをPRしてきました。区のバス旅行では新しい出会いが生まれるように年2回実施するなど工夫を続けています。滝ブラは、隣近所はもちろんのこと、第40区にとどまらず滝呂校区での絆を結ぶ取り組みです。歩いて動ける、通学圏内における共助の体制づくりを目指します。そこに自治組織の課題解決のヒントがあると思っています。滝ブラにかける滝呂校区民の熱意を他の地域にも発信していきます。

春日井市押沢台南で昨春に開催されたブラブラまつりの様子。

気軽に交流できる場の提供を

水野敏秋（としあき）さん
第23区元区長

ICTの進歩による社会のグローバル化により、地域における人と人とのつながりが希薄になってきていると感じていました。みんなが支え合い助け合えるような地域にしたいと考えていた時、「地域の活性化に役立つことをしないか」と市から持ち掛けられました。これが、「地域力」を意識した最初でした。

市の協力のもと実施した、住民アンケート調査（平成30年）と住民対象のワークショップ（令和元年）の結果においても、住民が抱える心配事の中に、高齢者などの支援や子ども・子育て支援、防犯・防災、環境保全などと並び、「地域の人とのつながり・交流」がありました。

この結果を受け、6月に立ち上げる小泉校区の地域社会福祉協議会（ふれあい小泉）は、「元気・健康なまち小泉を維持・継続して、みんなが安心して、楽しく暮らせるまちを創る」をスローガンに、地域のみんなが助け合い、支え合って人のつながりを深めるなどの地域支援のほかに、地域の連帯意識を高めるために地域の情報共有と意見交換をする場を設け、既設の団体である青少年まちづくり市民会議やKSC（小泉総合クラブ）および第23区防災委員会にアドバイザーとして参画していただき、小泉交流センターを拠点に地域の人たちが気軽に交流できる多様な場の提供をしていきたいと思っています。加えて、平成29年に中京学院大学と多治見市と小泉校区（23区、24区）との間で締結した「健康づくり」に関する協定も積極的に活用していく予定です。

3月29日に竣工したばかりの小泉交流センター。小泉地区の地域社会福祉協議会の活動拠点となる。

まずは自分で動く そんな人財が必要

吉田邦彦さん
根本校区地域力向上推進会議会長

根本校区地域力向上推進会議（以下「ねもと地域力」）は、地域住民が自らの力で楽しく安心して暮らしていけることを目的に、平成23年、市と協力して立ち上げたボランティア団体です。折しもこの年は、根本小4年生の男子児童が、台風15号で増水した用水路に流され、尊い命が奪われた年と重なります。その時、児童の捜索に集まった地域住民は約700人。当時民生委員として参加していた私は、必死な形相で捜索活動をする参加者たちの姿を目の当りにして、これこそが地域力だと思ったことを記憶しています。

児童の登下校を見守るねもと地域力の皆さん。子どもとの交流も生まれる。

ねもと地域力の基本方針を示す「根本校区地域力向上プラン」は、全戸対象の住民アンケートと6回にわたるワークショップを経て完成しました。方針に沿う形で、「防災」「地域交流」「高齢者・障がい者」「子ども・子育て」「防犯」「自然・生活環境」の6つのテーマを設け、グループごとに具体策を検討して活動を行ってきました。例えば、災害時に備えた携帯トイレの普及、児童登下校時の見守り活動、青パトによる防犯活動などです。また、認知症については、勉強会やサポーター養成講座などを開催し、地域の方々の理解と協力を得ながら、みんなで安心して元気に暮らせるまちづくりを目指しています。

68人の構成員は地道な活動を黙々とこなしていただき日々感謝しています。一方で、自主的に動ける人を増やすことが課題であると痛感しています。行政ができることは限られています。「みんなで育てる明るいまちづくり」をキャッチフレーズに、今後も住みやすい根本を住民の力で作っていきたいです。

複合的な取り組みが 地域力に

赤穂直文さん
AAK（笠原地域安心安全快適推進会議）

退職して家にいることが増えると、何か地元に貢献したいと思うようになりました。そんな時、市の高齢福祉課の呼び掛けで「笠原未来プロジェクト」に参加する機会をいただきました。話し合いの中で、私は「高齢化率の高い笠原で安心安全に暮らすにはどうしたらいいのか」というテーマに行きつきました。これがAAK立ち上げの経緯です。

平成29年、高齢者のニーズを把握するためにアンケート調査を実施しました。「病院、買い物、交流の場などへの移動」、「地域の見守りの充実」などと並び多かったのが「交流できる場所がほしい」というものでした。笠原では、かさはら福祉センターでサロンを開設してきた実績がありますが、そこまで行けない高齢者がたくさんいることが分かりました。そこで、笠原地域包括支援センター（以下「笠原包括」）と協力して上原地区と栄地区にサロンを開設するお手伝いをさせていただきました。

また現在は、「笠原お役立ちサービスマップ」の作成を手掛けています。病院、買い物できる場所、買い物代行業務を行う会社など、生活に役立つ情報を地図上に落とし込むというものです。高齢者でも一目で分かるマップを早く完成させて配布したいと思っています。

この他、上原地区では笠原包括の協力で「認知症サポーター養成講座」を3回（延べ100人が受講）行い、さらにフォローアップ研修（徘徊実地訓練）も実施しました。これは、AAKとは別に行っている活動ですが、こうした取り組みを複合的にしていくことが地域力につながると私は信じています。

地域の方の庭で「バラを見る会」を開催。鑑賞した後は用意したテーブルでお茶のふるまいも。

多治見市は、生涯学習を通じて、地域力向上と地域における連携・交流の構築を目指しています。

地域力の向上の鍵は互いへの感謝・信頼・尊敬

多治見市学習館 館長 **岩下英治**（えいじ）さん

学びを通じて人生を豊かに

公益財団法人多治見市文化振興事業団（以下「文化振興事業団」）は、平成9年に多治見市の施設を受託運営する団体として設立され、現在では、20施設にもおよぶ公共施設の※指定管理を受けています。私はその内の学習館（ヤマカまなびパーク内）に在籍し、市民が生涯にわたり学び続け、学びを通じて人生を豊かにするお手伝いをさせていただいています。

文化振興事業団が指定管理を受けている施設は、学習館をはじめ、市立公民館、バロー文化ホール、笠原体育館、図書館、市民活動交流センター、地球村、美濃焼ミュージアムなど多岐にわたります。このように、さまざまな目的を持つ施設を管理・運営することで連携が生まれ、それを活用して、市民のニーズに応えた学習講座やコンサート、スポーツなどを提供することができます。これは、多治見の生涯学習にとって一番の強みであると考えています。

多治見が誇る生涯学習の仕組み

もう一つ、全国に誇れる多治見の生涯学習の仕組みとして、「Viva!マナビバ」という生涯学習システムがあります。これは、特技・技能を持つ地域の方が自主的に講座講師（本システムでは「アドバイザー」と呼んでいます）となり、学習館や公民館などで教えるというものです。現在、クラフト、教養・ビジネス、ダンス、健康、語学、音楽など多様なジャンルで約60講座がエントリーされており、人財を発掘する役割も担っています。「Viva!マナビバ」の大きな特徴は、教える方の自主性を重んじ、講座の進め方や回数に至るまで全てを委ねているところです。そうすることで、アドバイザーの講座に対する責任感と熱量が変わってきます。この取り組みの最終的な目標は、教える側、教わる側の双方が講座での交流を通じて、自主的に生涯にわたって学び続けていただくことです。このシステムから自主的なサークル活動へと移行した例は多くありますので、さらに多くの方に活用していただけたらと思っています。

地域力向上における生涯学習の役割

今、地域の交流が希薄になっていることへの危機感から市民の方々の地域力を高める活動が市内各所で展開されています。一方で若い世代や新しい人の参加が伸び悩んでいるという話をよく聞きます。こうした課題に対し、公民館では地域の方々と共に世代を超えて集うコミュニティー作りなどを展開しています。「学ぶ楽しさを共有する。そして、一緒に考え、行動する人への『感謝・信頼・尊敬』を高めていく」機会を提供することが生涯学習の役割です。インターネットによって遠い場所にいる人やさまざまな情報に簡単にアクセスできる時代だからこそ、私たちは「実体験の大切さ」や「身近な人と喜び合う」といった生きがいにつながる活動を推進していきたいと思っています。

※地方公共団体やその外郭団体に限定していた公の施設の管理・運営を法人やその他の団体に包括的に代行させる制度。多治見市では条例に従いプロポーザルと総合評価により指定管理者を選定している

地域住民主体の生涯学習事業を展開

多治見市は、生涯学習に取り組む市民の活動をさらに活性化させ、その成果を生かしながら、身近な地域課題の解決に役立て、ひいては地域力向上につながる「**地域づくり型生涯学習**」を推進しています。

ここでは、ハードを持たない生涯学習事業と言われる「生涯学習コーディネーター事業」の現状を多治見市学習館の長谷川さんと三宅さんへのインタビューを通してご紹介します。

多治見市学習館
三宅朝子さん

多治見市学習館
長谷川智宏さん

生涯学習コーディネーター事業とは

長谷川　生涯学習コーディネーター事業とは平成26年度から始まった市の事業です。市立公民館がない共栄、昭和、池田、滝呂の各地域で集会所、小学校、児童館などの地域施設を活用し生涯学習講座を実施しています。地域の方や受講生の皆さんからのニーズ（要望）をできる限り反映させた内容となっており、回覧板や地域の核となる人（キーパーソン）などを介して、参加者を募っています。

地域ニーズを反映した事業内容

三宅　さまざまな講座の中からいくつか紹介します。まず生涯学習コーディネーター事業が開始された早々から継続している「ロコモ予防体操の講座」です。ロコモ体操とは立つ、歩くなどの機能が低下しないように行う軽い運動で、現在2地域で開催しています。講師が受講生ひとりずつ身体の調子を聴いたり、質問に答えたりする対話から体操が始まります。「健康づくり」に加え、参加者同士の交流のきっかけの場にもなっています。

また市民の発案から生まれ実施した講座もあります。そのひとつに「ニホンミツバチを通して環境を考える講座」があります。近隣住民に加え、環境に関心のある市民が多数参加し広がりをみせました。

他にも児童館母親クラブと連携して実施したダンスなどの親子講座や、地域サロンなど既存の地域コミュニティーやネットワークと連携して、各地域の特性や団体のニーズを組み取った内容の講座も実施しています。

長谷川　このように、開催する事業は地域のニーズや特徴を反映させ、さまざまですが、どの講座も回を重ねることに講師や受講生の皆さんの交流が進み充実してきています。現在市内4地域で開催している生涯学習コーディネーター事業の利点は「顔が見える交流」ができることです。同じ空間を共有することで絆は深まると考えます。気軽に参加できる自由度の高さも魅力の一つだと言われます。

つなぐことが地域力に

長谷川　少子高齢化が進み、地域のつながりが希薄になったと言われる現代で、これまで培ってきた文化・伝統をいかに次世代に引き継いでいくかが大きな課題だと感じています。私たちができることは「つなぐこと」です。文化・伝統の継承を含め、地域力向上の鍵は、小さなつながりの積み重ねであると思います。今後もそのお手伝いをしていきたいです。

三宅　子どもの頃と比べて、大人はどんなことを「学ぶ」のか、自分で選択することができます。ぜひ気軽に学びの場に参加していただけたらと思います。私たちは、生涯にわたって知的好奇心を満たす豊かな時間を今後も提供していきたいと思います。